

初期の渡辺版初日カバー

— 普通・航空・国立公園・年賀切手編 —

井戸垣 俊弘

「初期の渡辺版初日カバー」のご紹介第2段です。カバー収集を始めた動機・経緯・その中での「渡辺版」や「川瀬巴水」の位置づけ、参考文献、等については前回ご説明した通り（「げんかい586号（2019.3.3）」）ですが、まずは以下にその要点を再掲します。

■渡辺版初日カバーと川瀬巴水

- ・昭和23年から制作を開始した「渡辺版初日カバー」は、日本で最初の手刷り木版初日カバーで、版画専門店ならではの素晴らしい作品は多くの愛好家を生み、初日カバーのブランド品として確固たる地位を占めている。カシエの原画は郵政技官の他に「川瀬巴水」「名取春仙」「高田正二郎」「大塚慶治」等が担当、特に「川瀬巴水」の気持ちは高く、渡辺版初日カバーの名声を不動のものにした。川瀬巴水（かわせはすい、1883.5.18～1957.11.7）は、新しい浮世絵版画である新版画を創立した人物として知られる。日本各地を旅行して旅先の写生を原画とした近代風景版画の第一人者で、国内よりもむしろ海外での評価が高く、日本的な美しい風景を抒情豊かに表現したことから「旅情詩人」「旅の版画家」「昭和の広重」などと称される。中でも青色の用い方は絶妙であり、その印象的な青色は「巴水ブルー」と呼ばれている。

今回ご紹介するのは、渡辺版の骨格をなす普通切手を中心に、昭和20年代末までの最初期の作品の中の普通切手・航空切手・国立公園切手・年賀切手の初日カバー計83点と関連資料です。個々のカバーの詳しい説明は当日に譲るとして、ここでは概略のみをご紹介します。

■普通切手の初日カバー（41点）

- ・渡辺版の普通切手第1号は「第2次新昭和・1円50銭と3円80銭（1948.9.10）」である（図1）。因みに、渡辺版の初日カバー第1号は「第3回国体・水泳（1948.9.9）」であるので、その1日遅れということになる。最初期の渡辺版は木版で制作したカシエを封筒に貼り付ける「貼カシエ」が普通であったが、この普通切手第1号では木版を制作する時間的余裕がなくて孔版印刷で30部のみを制作したため部数が少なく極めて貴重な存在となっている。昨年のJAPEXのジャパンスタンプオークションでは異常高値落札（勿論、私ではありません！）となり、カバー愛好家の間で話題となった。
- ・産業図案切手については13点制作されており、高田正二郎や川瀬巴水などがカシエを担当。この中の、「5円茶摘み」「6円印刷女工」「100円電気炉」の3点は凸版印刷の同じ重工業カシエを流用した有合わせ版（図2）であり、原版をもとに個人で彩色したカシエも存在する。また、産業図案の最高額面「500円機関車」は収集家

にとって渡辺版の最難関カバーとして有名である（図3）。

- ・第1次動植物国宝は10点あり、秀作カバーが多い。中でも「5円尾長鶏（川瀬巴水作）」の白い尾のエンボス加工（図4）や、「50円中宮寺如意輪観音」の上品な雰囲気は極めて印象的である（図5）。

- ・第2次動植物国宝は17点制作されている。「1円前島密」「2円秋田犬」は渡辺版では珍しい写真版であるが、前者は殆ど流通しておらず、今回ご紹介するカバーは「しのび草（吉川洋一）」に収録されていたものが巡り巡って私の手元に来たものである。「20円金色堂」のカシエの原画は川瀬巴水の絶筆で、石段を上がる僧侶は人生の晩年にさしかかった巴水自身を表すかのように個人的にはお気に入りの1枚（図6）。また「500円八つ橋蒔絵」は各版元秀作揃いの「カキツバタ」の中でも最高傑作といえる（図7）。

■航空切手の初日カバー（19点）

- ・「キジ航空」と「立山航空（銭位と円位）」はそれぞれ全額面で同日発行なので、初日カバーには単貼り版と全種完貼り版の2種類がある。ここでは「キジ航空」と「立山航空（銭位）」についてはカシエの色違いが楽しめる単貼り版を、「立山航空（円位）」についてはスペースを取らない全種完貼り版を紹介した（図8）。なお、渡辺版の「五重塔航空」「大仏航空」はカシエに面白みがなく存在感が薄い。

■国立公園シリーズの初日カバー（13点）

- ・川瀬巴水は渡辺版の「国立公園シリーズ」全13作中の最後の「西海国立公園」を除いた12作を制作しており、いずれも川瀬巴水らしさが存分に発揮された傑作揃いである。この解説では「吉野熊野国立公園」と「十和田国立公園」の2点（図9と図10）を示した。残念ながらこの単色画像ではわからないが、前者のいわゆる「巴水ブルー」、後者の「微妙なグリーンの使い分け」を当日確認いただければ幸いである。なお、前者には有名な「贋作」があるのでそれも併せて紹介したい。

■年賀切手の初日カバー（10点）

- ・渡辺版の最初の年賀切手カバーは「昭和24年用年賀・はねつき」である。初回に限り、「木版タイプ」と「ロゴタイプ」の2種類を作成している。一般に渡辺版では小型シート用に特別なカシエを制作することは少なく、年賀切手に関しても昭和40年用までは単片と小型シートとで共通のカシエを使っている（昭和41年用からは刷色のみを変えている）。

以上、昭和20年代を中心にした「渡辺版の初期の初日カバー」を前回と今回の2回にわたってご紹介してきました。ただ、多くの人にとっては、このような古い時期の切手よりは青春時代を過ぎた昭和30年代以降（いわゆる切手ブーム期）の切手の方が思い出深いのではないのでしょうか。もし機会があればそのような「切手ブーム期の渡辺版初日カバー」もご紹介させていただければと考えております。

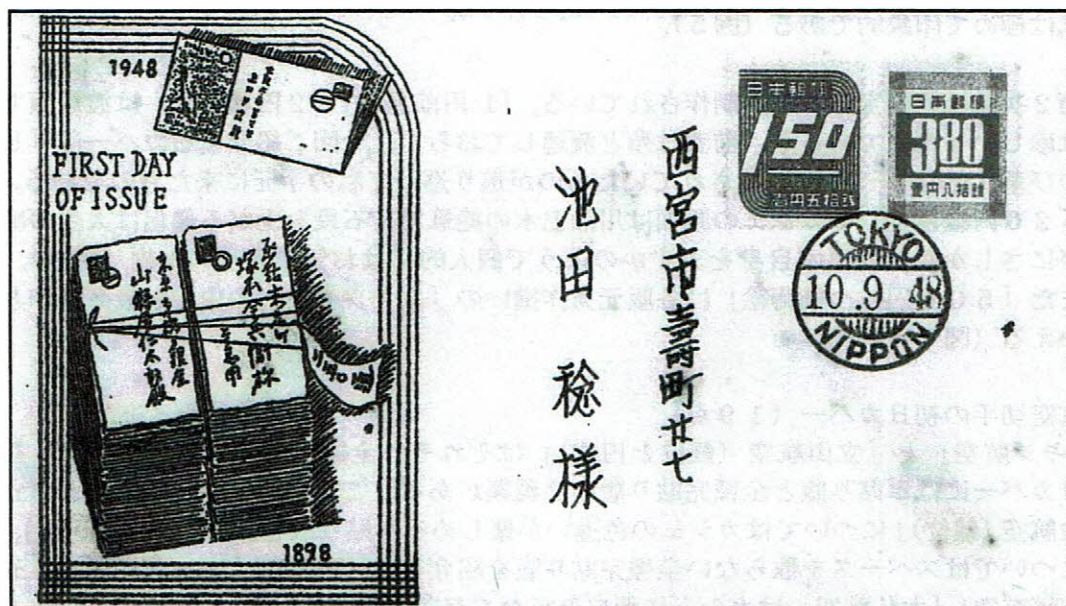


図1. 「第2次新昭和・1円50銭と3円80銭（1948.9.10）」普通切手第1号

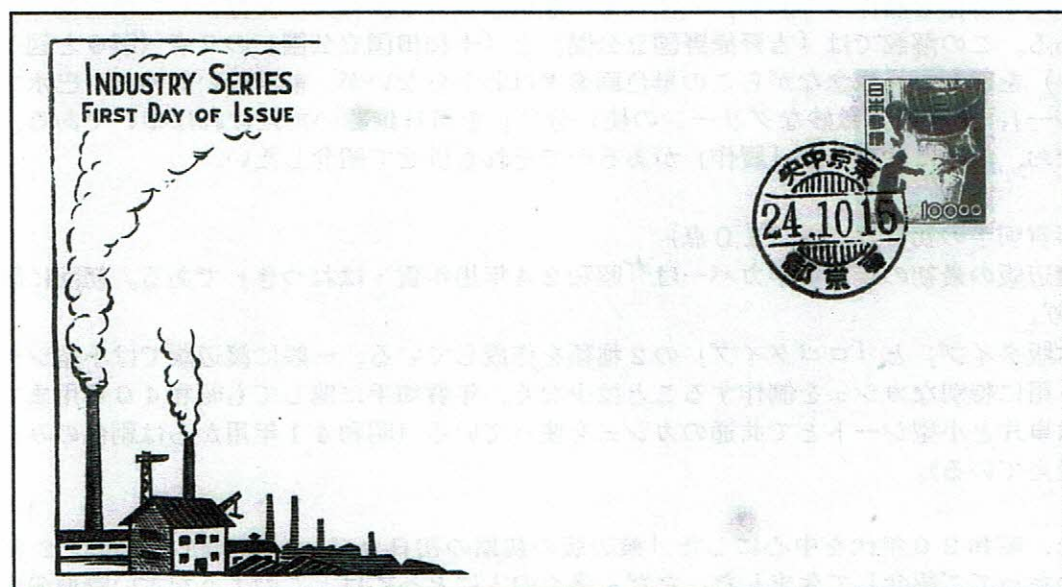


図2. 「産業図案・1000円電気炉（1949.10.15）」重工業カシエ3部作の一つ



図3. 「産業図案・500円機関車製造（1949.9.26）」 渡辺版最難関

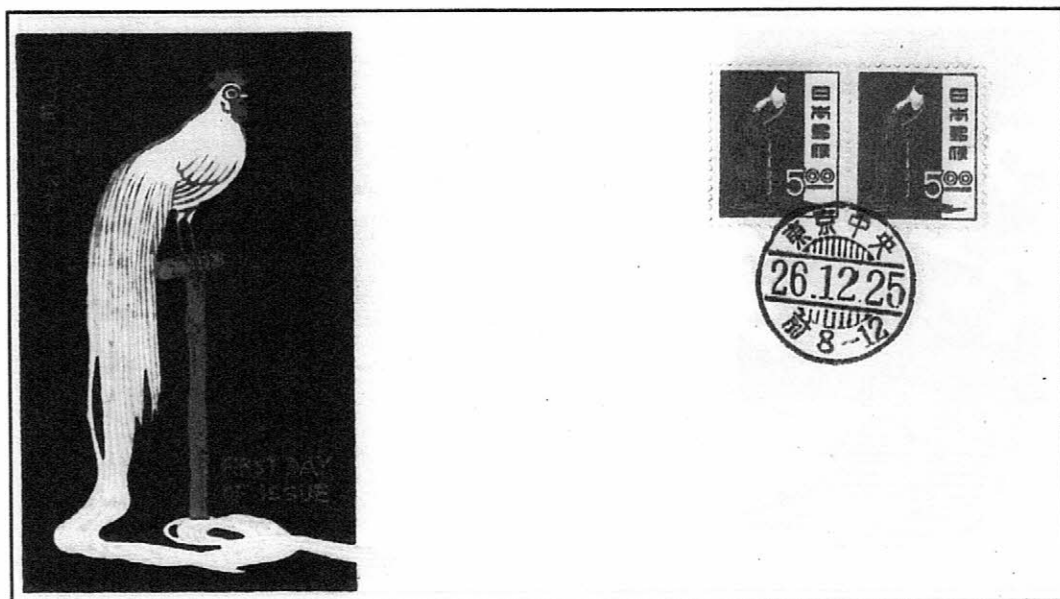


図4. 「第1次動植物国宝・5円尾長鶏（1951.12.25）」 カシエ：川瀬巴水

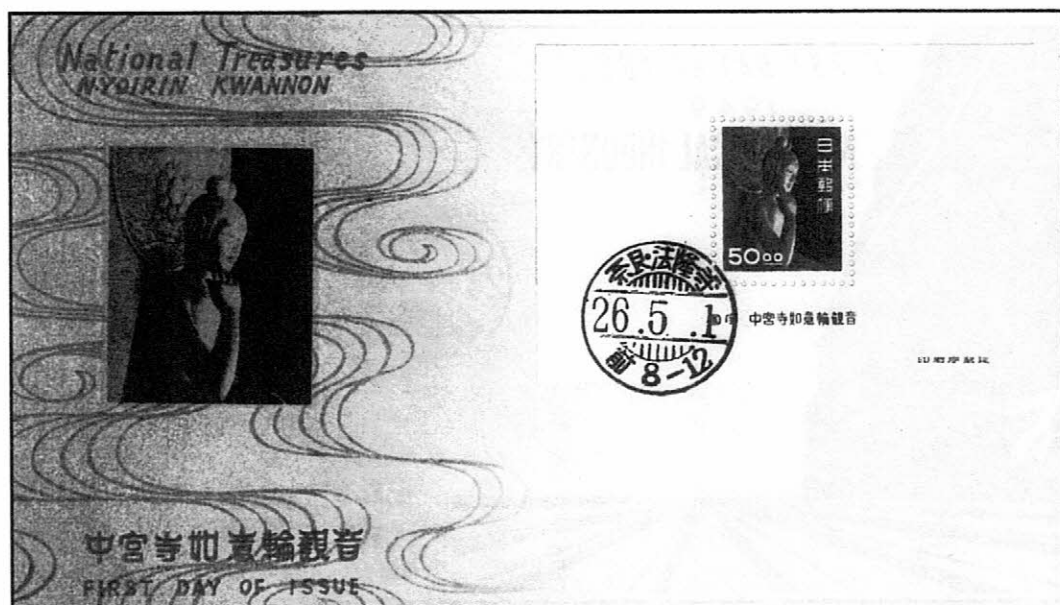


図5. 「第1次動植物国宝・50円中宮寺如意輪観音（1951.5.1）」小型シート貼り

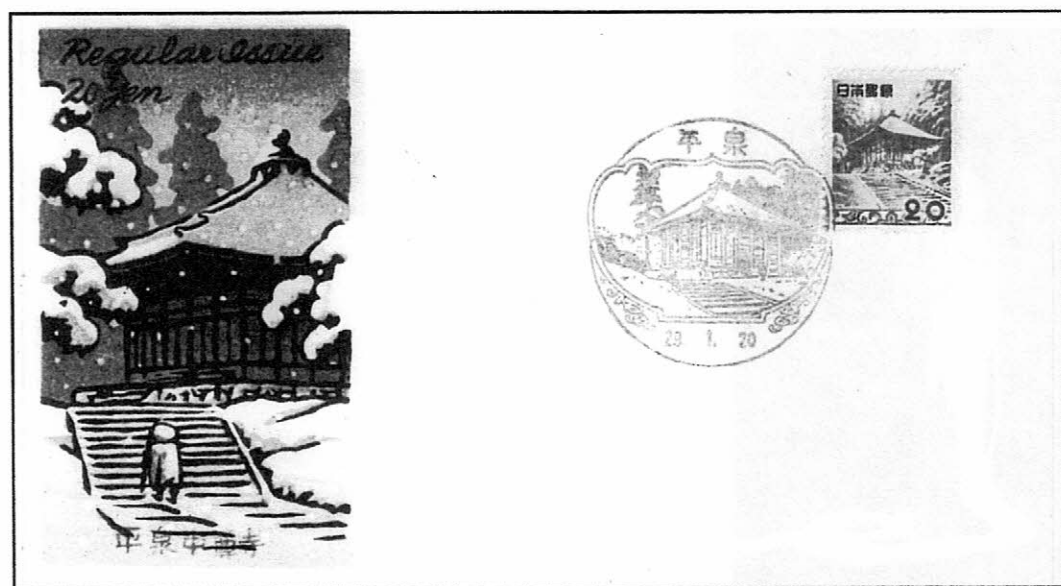


図6. 「第2次動植物国宝・20円金色堂（1954.1.20）」カシエの原画は川瀬巴水の絶筆

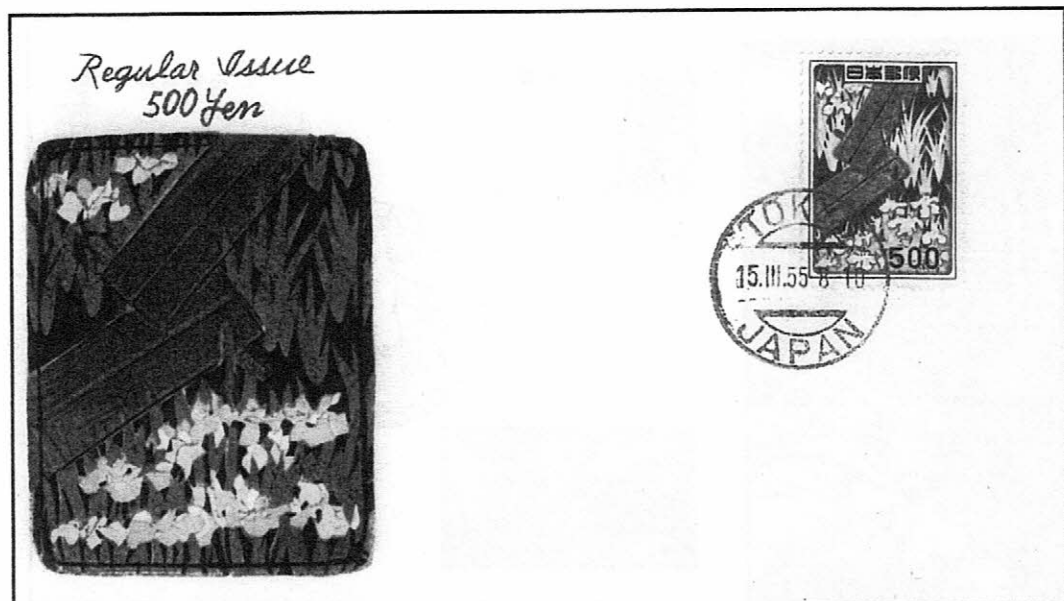


図7. 「第2次動植物国宝・500円八つ橋蒔絵 (1955.3.15)」制作数20部



図8. 「立山航空 (円位) (1952.1.31)」 6種完貼り

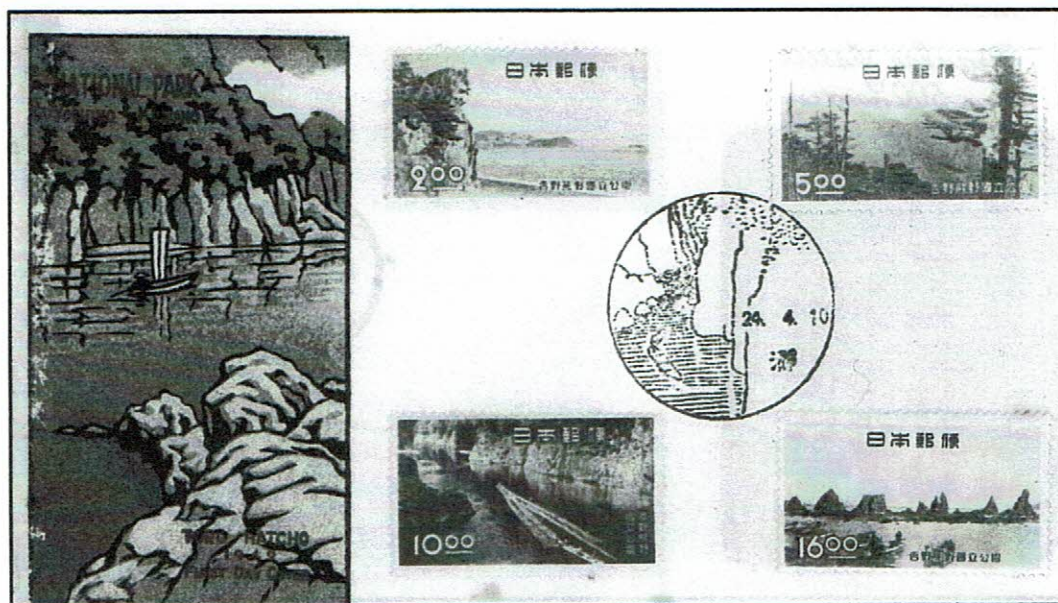


図9. 「吉野熊野国立公園 (1949.4.10)」カシエ：川瀬巴水 (偽作品がある)

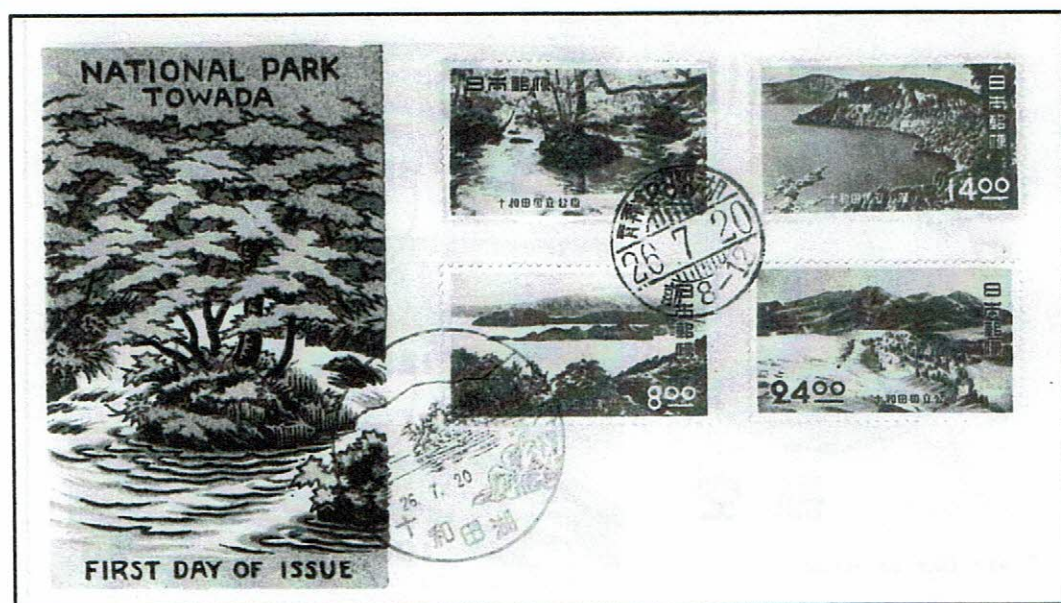


図10. 「十和田国立公園 (1951.7.20)」カシエ：川瀬巴水